

2007 年国際ウィトゲンシュタインシンポジウム報告

2007/12/29

岡本 由起子

E-mail fmyok97@1974.jukuin.keio.ac.jp

欧州連合・情報ソサエティ

eContent+ プロジェクト

2007 年国際ウィトゲンシュタインシンポジウム (<http://www.alws.at/wittgenstein07.htm>) が、例年のようにオーストリアで 8 月の第一週から、今年は「情報社会における哲学」というテーマで開催されました。

この夏の初め、この HP 上に追加の論文募集についての記事を掲載して頂きましたが、日本からは、追加応募はなく参加は一人でした。欧米が中心ですが、毎年アジア・アフリカからの参加（インド、中国、台湾、韓国、日本など）があります。例年は全体で 200 人ほど。今年もその程度でしょうか。8 月 5 日朝から 11 日のお昼までぎっしりつまったプログラムでした。情報社会という観点から、認識論（知識論）、存在論（形而上学）、倫理学、言語論・意味論といった哲学的な問題だけでなく、ウィトゲンシュタインの哲学についても議論されました。朝 9 時過ぎから基調講演が、午前 2 つ午後 1～2 つ、セッションは 5 つのテーマに分かれてそれぞれ午後 3～4 つ。全体では基調講演 14 回、セッション 106 回、その他にワークショップ／パネルディスカッションなどでした。

もはやインターネット上の知なしに知識論は語れず、伝統的な哲学的文献もデジタル・アーカイブスとなってきた現在、形而上学（何が存在するかという存在論）はオントロジと融合するかに見え、緊急の課題として、情報技術が促進し容易化した「グローバルゼイション」を考慮する倫理（a global Information and Computer Ethics [ICE]）が求められています。プログラムからいくつかをご紹介しますと思います。

*オープニング講演：

「情報の形而上学」と題し、フレッド・ドレッツキ(F.Dretske スタンフォード：1981 年に著書『知と情報の流れ』で、全ての現象を情報として捉える認識論を提唱)によって、8 月 5 日の朝 10 時から行われた。

趣旨：莫大な費用をかけ、誰もが必要だと言うに足らず「情報とは何か」について、意見は一致していない。しかし少なくとも 3 つの特徴がある。それらは、1, 意味的な存在者であること、2, 真でなくてはならないもの、3, 人から人へ譲渡可能なもの、である。「形而上学的な獣」とすら呼べる「情報」の本質を規定している。

*招待講演から：

・クラウス・ヒュイットフェルト「テキスト技術と哲学」(C.Huitfeldt ベルゲン)

(ヒュイットフェルト氏は、ベルゲン大学ウィトゲンシュタイン・アーカイブス [WAB] の創設者。WAB <http://gandalf.aksis.uib.no/wab/> は、1990 年代から 2000 年初頭にかけて

ウィトゲンシュタインの文献をデータベース化、さらにアーカイブ化し、あらたなウィトゲンシュタイン研究方法の領野を切り開いたプロジェクトの名称。現在はアーカイブスのメンテナンスと、EU のイーコンテンツプラス・プロジェクトの一環として、オントロジ作成を研究目標に、プロジェクトは続行されている。日本からは、大阪大学奥雅弘前教授〔故人〕が WAB との連携を図り、『電子版・遺稿集』によるウィトゲンシュタイン研究の先鞭をつけた。その成果は『ウィトゲンシュタインの遺稿の哲学的・文献学的研究』に。）
(筆者は 1995 年のウィトゲンシュタインシンポジウムにて、ウィトゲンシュタイン文献のデータベース化プロジェクトに関するワークショップに参加した。)

趣旨：通常、われわれのテキスト概念は、少なくともある部分は、文書作成、配布、保存、そして表示の際に知らずに使われている技術によって形成されると考えられる。

また一般に、文書の表示とテキストの解釈とを区別できるということは、いろいろな面で重要であるという認識も共有されている。けれども、どのように、またどれくらいその技術がわれわれの概念形成に関わっているか、また表示と解釈との関係をどう理解するかということに特定してそれを明確に説明するとなると、一致した見方がなかなか得られないということも確かだ。テキスト技術における昨今の発展が生み出した問題があるが、その問題の発生の仕方の中に、問題への新たな答えを見つけるヒントがある。

・アレン・リニーア(A.Renear イリノイ)「デジタルテキストのオントロジ的の身分～多元主義的アプローチ」

趣旨：情報科学の常套句にひそむ形而上学(オントロジ)は理論的に欠陥があるだけでなく、文化的対象の管理やデジタル的表示における実際的問題の解決の足を引っ張っている。この視点から、すでにある形而上学の修正ではなく、あらたな形而上学の可能性をさぐる。歴史的には一致することのなかった〔形而上学的〕論争への多様な観点を許すような、全く別な概念化への共同作業である。そのさい、相互理解を確保することが共同作業を促進する。そのようなアプローチへの可能性は、哲学から中立なオントロジの統合・調和への関心にすでに潜んでいるという。しかしながら、この課題を完成させるには、これまで形而上学の恒久的特性であった「歴史的アンチノミー」を認識することが必要なのである。

・ダニエル・アポロン(D.Apollon ベルゲン)「われわれが哲学しているとき～「情報主義」のパラダイムは、哲学にとってのあらたなレジームか？」

趣旨：歴史的に哲学もまた、表層的にせよ核心的にせよ、さまざまな社会文化的レジームに支配されてきた。哲学がテキストに定位した知的営みであるからだが、現代では、それが情報主義といえるのではないか。これは、すでに 1945 年ヴァニヴァー・ブッシュが言ったことだ。グーテンベルグの時代から、今日の、すっかりネットワーク化された情報文化まで、哲学もまたパラダイムに従ってきた。グローバル化し、ネットワーク化した情報・伝達技術の浸透が、文化的社会における哲学的に独自の問題を再活性化している。この情報主義というレジームは、どのように哲学にとってのパラダイムとなるだろうか？

* 基調講演から

・チャールス・エス(C.Ess ドゥルーリ)「プライバシーについての東の西の観点～倫理的

多元主義とグローバルな情報倫理」

趣旨：情報と伝達の技術 (Information and Communication Technologies [ICTs]) は、グローバル化の主たる促進者であり、それを容易にしてきた技術である。またそれによって、文化横断的な遭遇を幾何級数的に広げてきたが、そこにグローバルな倫理的規範 (グローバルな情報とコンピュータ倫理 ICE) が必要であることが議論されてきた。民族主義的帝国主義 (つまり文化間で公約不可能な、行動パターンや規範の違いというもの) を消し去ろうとする文化横断的な遭遇への態度) を避け、同時にグローバルな ICE を発展させるという二重の関心が ICE (グローバルな情報とコンピュータ倫理) の眼目であるが、それに適合するような価値や規範についての研究現状を概観し、ICE の中に生じてきている実際的な問題、特にプライバシーとその保護について西洋と東洋それぞれの文脈に於いて論じる。(日本のブログにみられるプライバシー露出の傾向について、Ess は文化的背景としての仏教的な「無我」の伝統に言及。これについて筆者は、そうしたブログ作者の若者層には仏教的文化的伝統はなく、露出は彼らの自己顕示欲の一形態にすぎず、この傾向は仏教の無我とは無関係であると反論。)

・マイケル・ハイム (M.Heim カリフォルニア) 「生活形式、指示、そしてアバターの言語」
インターネットはコミュニケーション環境を拡大増幅させてきた。われわれのコミュニケーションには、映像や、アニメーション、また、ハイパーリンクの指示も期待できる。その活況ある様相が、指示の問題、同一性、実体性、についての [伝統的哲学の] 問題を再燃させている。それを集約しているのが「映像的アバター」である。

Heim はアバターによる新たなコミュニケーションの可能性を強調。アバターは現実世界の存在を指示しそれを代理する。しかしその言語行動は感情をうまくコントロールする。それゆえ実動的でありながら、従来のさまざまな軋轢に妨げられず理想的なコミュニケーションが可能である、というのである。

・アナト・ビレツキ (Anat Biletzki, ティルアビブ) 「ウィトゲンシュタインの「言葉の意味とはその使用である」という意味理論について」

趣旨：デジタル化への転回という概念的革命のさなか、20 世紀に出てきた形式数学的あるいは実用論的意味論のいずれもが、意味概念に満足のいく説明を与えられていない。デジタル文化の中に現存している考え、概念、用語の意味を真に教示していないのだ。そこで、ウィトゲンシュタインの「意味は使用」理論が役立つ。用語や概念を検討し、それらがデジタル的に使われている文化的な新たな言語的状況を記述することで、ウィトゲンシュタインを踏襲するのだ。デジタル的文脈において「言葉の意味はその使用である」という理論を適用するとは、用語や概念をよく見て、それらがデジタル的に使われている文化的、新たな言語的状況を記述することである。デジタル的文脈における「意味は用法」という理論の適用は、おそらくデジタル化の将来性と曖昧さに対応できる唯一で最善の意味の理論であろう。

*その他の基調講演：

・グレゴリー・チャイティン (G.Chaitin) 「数学とプログラムについて」：超数学の歴史を、

ヒルベルト、ゲーデル、チューリング、さらに、チェイティン自身の考えを含み、ライブニッツの形而上学叙説にまで遡る。プログラミングと数学の関わりについて。

- ・ジークフリート・J・シュミット(S.J.Schmidt)「メディア哲学：論述か訓練か」
 - ・クリス・チェシャー(C.Chesher)「時間統合：ハルロド・イニスとニューメディアの均衡」
 - ・アーシュラ・シュナイダー(U.Schneider)「グローバル化した知の産出」
 - ・ニュートン・ガーバー(N.Garver)「文法と沈黙」
 - ・ジュリエット・フロイド(J.Floyd)「ウィトゲンシュタイン、読解、機械読解とデジタル時代」
 - ・N.ゴットシャルク-マツオーツ(N.Gottschalk-Mazouz)「インターネットと知識の流れ ～われわれが直面するのはいかなる倫理的状況か」
 - ・ルキアーノ・フロリディ(L.Floridi)「関連情報の主観主義的解釈」
- など。

*ワークショップ／パネルディスカッション

- ・「電子的哲学リソースとオープン・ソース／オープン・アクセスについて」討論を2回。
- ・「情報社会における哲学」と題しての全体パネルディスカッション。